



文化

## 塩沢の織物

～歴史と想いが紡がれた織物～

冬は2メートルもの雪に覆われる南魚沼、塩沢地域。  
今は消雪パイプや除雪車のおかげで冬でも外に出ることができるが  
技術が発展する以前は、人力で除雪をするしかなく  
冬場は家の外に出るだけでも大変なことだった。

そしてこの地域の仕事といえば、今も昔も農作業が主なもので  
田畑が雪に埋もれて農作業ができない冬は、  
どうしても家の中にいることが多くなっていた。

だが、雪国の冬は長い。  
そこで、稲わらを使ったわら細工など  
家の中でできる仕事が冬の重要な収入源となっていたが  
その中でも、特にこの地域の特産となったものが「織物」である。

塩沢の織物の歴史は古く、  
今から1200年以上前に、この地で織られた麻布が  
奈良の東大寺正倉院に収められていることから  
少なくとも、その頃には上質な織物の産地となっていたことがわかる。

この麻織物というのが「越後上布」で  
この技術を絹織物に応用したものが「本塩沢(塩沢お召)」となり、  
さらに真綿糸を取り入れた織物が「塩沢紬」である。

塩沢紬は江戸時代中期から作られはじめ  
その特色として縦糸は生糸・玉糸を使用  
横糸は真綿の手紡ぎ糸を使用するなど、細かな決まりがあるが  
先染めの糸による細かな縞模様は独特で  
決して派手ではないが、上品さを感じられる織物となっている。  
辞書にも「塩沢」という道目で織物のことが載っており  
「塩沢」という言葉はそれだけで塩沢の織物のことを表していることがわかる。

昔、機織は女性の仕事であり、嫁をとる際には  
器量の良さより機の腕の良さの方が重要視されていたそう。

布を一尺(約 38 センチ)織る本塩沢はナント！  
1,000 回以上も手を動かさなければいけない。  
一反織り上げるのには、とても長い時間がかかった。  
それは大変な仕事だったが、長い冬を家の中で過ごさなければならない女性たちにとっては、  
最適な仕事であり、より良い布を織れるよう、皆が技術を磨いた。

なので、この地域には機織に関する伝説も多い。  
塩沢を代表する山、巻機山。  
日本百名山のひとつでもあるこの山の名前の由来も機織姫から来ている。

昔々、母の病を治すため薬草を探しに山へ入った若者がいた。  
しかし道に迷ってしまい絶望する若者。  
そこへ山に住んでいた美しい機織姫が現れ夜道を導き、助けてくれたという。

姫が機を織っていた山頂付近には、今でも御機屋(おはたや)という呼び名が残っている。

また、巻機山の麓の大木六地区にある木六神社も  
機織の上手な天女を鎮守として祀ったと言われている。

柳田国男の書にも取り上げられており  
千年近い歴史のある神社だ。  
木六神社の祭神は「栲幡千千姫命」(たくはたちぢひめのみこと)  
といい、機織の神様である。

面白いことに、この神様を祭る神社に

「塩沢神社」というところがある。

場所は福島県二本松市の旧塩沢村。

この地域は戦国時代、南魚沼出身の上杉景勝、直江兼続が治めた地でもある。

上杉家の会津移封の際、商人や農民はもちろん  
稲作や織物などの技術の他に、  
寺院や神社も移転したものがいくつかあるというが  
これもその一つなのかもしれない。

塩沢牧之通りから伸びる脇道に「つむぎ小路」という小道がある。

この周辺は機屋が多く、昔はいたる所から「トンカラリン♪トンカラリン♪」と  
機を織る軽快な音が聞こえてきたことからそう名づけられたという。

今は機屋や織り子も少なくなってしまったが  
この道を歩いていくと「塩沢つむぎ記念館」にたどり着く。

塩沢紬の歴史や織物ができるまでの工程を学べ  
塩沢紬の機織も体験することができる。  
機織体験はコツをつかむとなかなか面白く  
あっという間に時間が経ってしまった。

南魚沼の歴史と想いが紡がれた「塩沢の織物」。  
いつかこの着物を着て、町を歩いてみたい。